

村上春樹小説における「虚」と「実」

——「中国行きのスロウ・ボート」の中国人について

関 氷氷・楊 炳菁

The Objective and Nonobjective Images in Haruki Murakami's Works:
an Analysis about the Chinese in *A Slow Boat to China*

GUAN Bingbing, YANG Bingjing

A *Slow Boat to China* is the first short story written by Haruki Murakami. Researchers hold different opinions on whether the images of Chinese people in this short story relates to the state, which leads to the major controversies over the interpretation of the story. In this thesis, text analysis is taken as measure to probe deeply into the role of the structure and the Chinese characters of *A Slow Boat to China*. This thesis will elaborate whether the Chinese people in the story relates to China, and then illustrates the unique narrative means used by Haruki Murakami.

Key words: Haruki Murakami, *A Slow Boat to China*, Chinese, objective and nonobjective images

キーワード：村上春樹、中国行きのスロウ・ボート、中国人、「虚」と「実」

はじめに

1980（昭和55）年4月号の『海』に掲載された「中国行きのスロウ・ボート」は村上春樹の初めての短編小説である。この短編は後「貧乏な叔母さんの話」, 「ニューヨーク炭鉱の悲劇」, 「カンガルー通信」, 「午後の最後の芝生」, 「土の中の彼女の小さな犬」, 「シドニーのグリーン・ストリート」とともに短編集『中国行きのスロウ・ボート』（中央公論社, 1983年）に収録され、表題作にもなった。1990（平成2）年, 村上春樹は自選集『村上春樹全作品1979～1989』（講談社, 1991年）を出版し、「中国行きのスロウ・ボート」は大幅に改稿されたうえ、第三巻に収録された¹⁾。

1) 本稿は『村上春樹全作品1979～1989』第3巻（講談社, 1991年）に収録された「中国行きのスロウ・ボート」を研究対象とする。改稿問題について、山根由美恵氏の『村上春樹〈物語〉の認識システム』（若草書房, 2007年）に詳

「中国行きのスロウ・ボート」は五つの章から構成され、主人公の「僕」と三人の在日中国人との出来事が描かれた。小説のタイトルに「中国」があり、主人公の回想も中国人と関わっているためか、この短編は特に中国人読者の注目を集めた。加藤典洋氏は『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』において、つぎのようにこの現象を述べた。「……リポートのようなものを書いてもらうことをここ数年やってきています。すると、毎回、中国人ないし中国系の若い人がこの作品について書いてきます。タイトルに中国が出てくるだけではない。いわば主題が日本に住む中国人との関わりなのですから、あなた方のうちの何人かが色めきたち、関心を寄せるのは当然と言えます。」²⁾ 実は、この短編は単なる中国人読者の注目の的だけでなく、中国ならびに中国人に対する感情を表す作品として読む日本人研究者もいる。例えば藤井省三氏は『村上春樹のなかの中国』で、魯迅の「藤野先生」との関連性からこの短編を分析し、三人の中国人に対し「僕」の「背信」行為があり、「中国」への背信と原罪がこの短編の主題だと論じている³⁾。そして、前述の加藤氏も中国人をめぐる三つの挿話を紹介して、三人の中国人が伝えたことをさらに詳しく論じていた——一人目の中国人教師は「日本に長い間侵略行為を受け、その後十分に謝罪されるということもないまま、その日本と一定の「善隣外交」をもとうという中国の姿勢」⁴⁾を伝え、二人目の中国人女子大生は「日本国内で少数者の立場に置かれ、差別の対象ともされてきた在日中国人」⁵⁾の代表である。それに三人目の中国人セールスマンに対する「僕」の態度は、まさに「日本人の健忘ぶり」⁶⁾を表しているのである。藤井氏と加藤氏は違う角度から「中国行きのスロウ・ボート」を論じているが、小説に出てきた中国人を「実」のものとして捉える点では同じであろう。所謂「実」のものは、中国人を「中国」という国家と結びつける、換言すれば、中国人は「中国」という国の代表であるということなのだ⁷⁾。

一方、「中国行きのスロウ・ボート」に出てきた中国人に対し、日本人研究者の中には違う意見を持つ人もいる。1983（昭和58）年、青木保氏は「六〇年代に固執する村上春樹がなぜ八〇年代の若者に支持されるのだろう」という文章で、次のように書いたことがある。「ここまでくると、読むがわにとって、中国人のことはもうどうでもよくなってしまって、語られようとするのは六〇年代から八〇年代へかけての「僕」の辿った道筋の里程標であることがわかる。」⁸⁾ また、黒古一夫氏も『村上春樹「喪失」の

しい。

2) 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』（講談社、2011年）、99頁。

3) 藤井省三『村上春樹のなかの中国』（朝日新聞社、2007年）、38-49頁。

4) 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』（講談社、2011年）、106頁。

5) 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』（講談社、2011年）、107頁。

6) 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』（講談社、2011年）、107頁。

7) 藤井省三氏と加藤典洋氏のほか、山根由美恵氏とジェイ・ルービン氏も似たような考えを示している。山根由美恵氏は自分の著書『村上春樹〈物語〉の認識のシステム』（若草書房、2007年）で、単行本「中国行きのスロウ・ボート」を研究対象に、作中の「僕」が三人の中国人に対して無意識の悪意を持っていると論じたことがあり、ジェイ・ルービン氏は『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（畔柳和代訳 新潮社、2006年）で、「中国行きのスロウ・ボート」における記憶の問題に注目し、「いまでは、日本人にとって、かなり厄介な記憶として、村上が中国と中国人を一貫して意識してきたと見ることができるだろう」と書いた。

8) 青木保「六〇年代に固執する村上春樹がなぜ八〇年代の若者に支持されるのだろう」（『中央公論』1983年12月号）。

物語から「転換」の物語へ』において、「この短編は八〇年代に書かれたものであるが、ここに示されているのは民族や人種は人間と人間の関係にとって何の意味も持たないとする、徹底した個人主義思想である。……常識的・一般的な考え方に過ぎないが、「差別」こそ人間の最も醜いにくむべきものであるとする考え方が根底にあったが故に、「相手が日本人だろうが中国人だろうが、同じことだ。」という考え方を村上春樹は身につけることが出来たのだろう。」⁹⁾と論じていた。青木氏と黒古氏の共通点と言えば、小説における中国人を「虚」のものとして捉えていることである。つまり、「中国行きのスロウ・ボート」に出てきた中国人は、「中国」という国家とは何も関係を持たない存在で、単なる記号のようなものである¹⁰⁾。

以上のまとめからわかるように、もしこの短編に出てきた中国人を「実」のものとして捉えれば、「僕」と三人の中国人はそれぞれ「日本」と「中国」の代表で、「僕」と彼らとの出来事そのまま日中関係の暗示になる可能性が高いと思われるが、逆に中国人のことを「虚」のものとして捉えれば、「中国行きのスロウ・ボート」は完全に「僕」を中心とした物語となり、中国人は何か役に立つ存在、青木保氏の言葉を借りれば、「人生の里程標」のようなものになるかもしれない。「中国行きのスロウ・ボート」への解説は、小説に出てきた中国人をいかに捉えるかによって、大きく左右される。そして、これは単なる読者の立場の問題だけではなく、村上春樹の創作方法にも多大な関係があるだろう。したがって、本稿は「中国行きのスロウ・ボート」の主題を検討し、登場した中国人の「虚」と「実」を究明したうえで、村上春樹の創作方法を考察する。

一 「中国行きのスロウ・ボート」の構造

「中国行きのスロウ・ボート」は五つの章から構成されている。「1」と「5」の両章は「僕」の物語で、「2」、「3」、「4」章ではそれぞれ「僕」と三人の中国人との出来事が描かれている。内容から見れば、「2」～「4」の三つの章は「僕」の回想とは言えるが、「1」と「5」の両章と直接的な関係がなく、むしろ「1」と「5」の両章と並行に書かれているのであろう。「僕」の物語と「僕」と三人の中国人との出来事、この並行に書かれた二つの部分はいったいどんな関係にあるのだろうか。

「中国行きのスロウ・ボート」の構造について、最初に注意を払ったのは阿部好一氏である。阿部氏は「村上春樹論の試み——短編二、三の読解をめぐる」において、小説の構造について、つぎのように述べた。「この小説は現在からはじまり、現在で終わる。その現在は小説の発表された年であるから、この小説は一種のリアル・タイムとしての「1」と「5」という額縁を持ち、それらは小説全体にたいして

271頁。

9) 黒古一夫『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』(勉誠出版、2007年)、158頁。

10) ただ、黒古一夫氏はここで国家、民族の概念を否定し、青木保氏からすれば、「中国行きのスロウ・ボート」においては、国家、民族などの概念はむしろ存在しないと言ってよいだろう。また、黒古氏と青木氏のほか、田中実氏は「港のない貨物船」(『国文学解釈と鑑賞』1990年12月号、162-168頁を参照)で、「中国行きのスロウ・ボート」に出てきた中国人のことを他者の総体として捉え、これも中国人を「虚」のものとして捉える一例とは言えよう。

メタ性を持つことを意味する。]¹¹⁾「1」と「5」の両章は「僕」の物語で、この「僕」は小説の主人公であると同時に語り手でもある。叙述時間から見れば、確かに阿部氏の指摘したとおり、「1」と「5」の両章が一致し、それに挟まれた「2」～「4」の三つの章は語り手の回想である。しかし、前述のように、内容から見れば、この二つの部分は無関係な状況にあり、たとえ「2」～「4」の部分を「僕」の回想と見なしていても、その回想はいかにも「僕」の物語と直接関連性がないように見える。要するに、「中国行きのスロウ・ボート」は、前後両章の時間的一致性によって統合することが出来ず、物語としての内的必然性が欠けていると言えよう。それなら、所謂「額縁」の構造をとったこの短編は、一体何によって統合されたのだろうか。

「中国行きのスロウ・ボート」の「1」の最後のところ、小学校時代野球の試合で脳震盪を起こした「僕」のことが描かれた。センター・オーバーの飛球を全速力で追っていた「僕」は、バスケットボールのゴール・ポストに激突し、脳震盪を起こし、「目を覚ましたのは葡萄棚の下のベンチ、もう日」¹²⁾が暮れかけた時だった。「僕」はその時何かをしゃべったらしいが、覚えていないため、友達には「あとになって恥ずかしそうにそれを教えてくれた」(13頁)。「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」(13頁。ゴシック体原文、以下同様。)、これがその時「僕」の言った言葉である。「そんな言葉が何処からでてきたものか」(13頁)は分からないが、「僕」にとって重大な意味を持つことに違いない。なぜなら、「僕」は「それから二十年経った今でもときどき、この文句を頭の中で転がしてみる」(13頁)し、「僕という一人の人間の存在と、僕という一人の人間の辿らねばならぬ道について考え」(13頁)る時も、「そのことを頭にとどめながら」(13頁)そういう作業をやったからなのである。そして、この短編の「5」の最初のところには、次のように書かれている。

すでに三十歳を超えた一人の男として、もう一度外野飛球を追いながらバスケットボールのゴール・ポストに全速力でぶつかり、もう一度グローブを枕に葡萄棚の下で目を覚ましたとしたら、僕は今度はいったいどんな言葉を口にするのだろうか？あるいは僕はこう言うかもしれない。ここは僕のための場所でもないんだ、と。(38頁。傍点原文、以下同様。)

「5」の最初は、明らかに「1」の最後の場面の繰り返しである。つまり「僕」は「もう一度外野飛球を追いながらバスケットボールのゴール・ポストに全速力でぶつかり、もう一度グローブを枕に葡萄棚の下で目を覚ました」自分のことを想像したわけである。しかし、同じ場面の繰り返しとはいえ、主人公の言葉は「1」の最後に出てきた「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」と違って、「ここは僕のための場所でもないんだ」と変わった。ここで注目したいのは、「僕」の言葉に付けられた傍点とゴシック体の表記である。傍点の付け加えとゴシック体の表記によって、「ここは僕のための場所でもないんだ」と「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」の重要性が窺われ、それゆえに、「1」と「5」の両章は叙

11) 阿部好一「村上春樹論の試み—短編二、三の読解をめぐる—」(『神戸学院女子短期大学紀要』1989年3月)、1-2頁。

12) 村上春樹『村上春樹全作品1979～1989』第3巻(講談社、1991年)、13頁。以下、テキストの引用は頁数だけを記す。

述時間の一致というより、むしろこの同じ場面の繰り返しによって繋がれているのである。そして、前後2回の「僕」の言葉を考察すれば分かるように、同じ場面においても、「僕」の心境に変化が起こり、「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」がいくら困難にあっても諦めない少年時代の「僕」の象徴とさえ、「ここは僕のための場所でもないんだ」という言葉の背後に、敗北感を強く感じている「僕」のイメージが潜まっている。同じ場面における両センテンスの間は、まさに一人の少年から30歳を超えた大人への変化で、いままで歩んできた「僕」の人生そのものでもある。

一致した叙述時間というより、「中国行きのスロウ・ボート」はむしろ同じ場面の繰り返しと「僕」の口から出た異なる言葉によって、「1」と「5」を一つの物語に繋いだのである。「そのことば（「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」を指す——筆者）を頭にとどめながら、僕は僕という一人の人間の存在と、僕という一人の人間の辿らねばならぬ道について考えてみる」（13頁）から、「1」は「僕」の人生思考の起点となり、「もう一度外野飛球を追いながらバスケットボールのゴール・ポストに全速力でぶつかり、もう一度グローヴを枕に葡萄棚の下で目を覚ましたとしたら」、「ここは僕のための場所でもないんだ」と言うかもしれぬ「5」は、人生思考のたどり着いたある時点に相当するものであろう。この首尾一致した「中国行きのスロウ・ボート」の構造は小説の中心を規定し、つまり、この短編はほかならぬ「僕」の人生思考で、「1」と「5」の両章はそれぞれ思考の起点とたどり着いたある時点を意味しているのである。したがって、「中国行きのスロウ・ボート」は小説の内的必然性を保つため、「2」～「4」の部分を「僕」の人生思考と関係付けねばならず、この「2」～「4」の部分は、まさに「僕」と三人の在日中国人との出来事なのである。

二 中国人の役割

「中国行きのスロウ・ボート」の構造から分かるように、この短編は「僕」の人生思考を中心とした小説で、「1」と「5」はそれぞれその思考の起点とたどり着いたある到達点を意味している。それゆえに、「2」～「4」の部分は「僕」の人生思考と関わってこそ、「中国行きのスロウ・ボート」は一つのまとまった物語として成立し、統合性のある小説になるのではなかろうか。それなら、「2」～「4」の部分に登場した三人の中国人はいかに「僕」の人生思考と関わり、その関連性は如何なるものであろうか。

「中国行きのスロウ・ボート」の「5」のはじめに出た「ここは僕のための場所でもないんだ」という文は、中国人の役割を解明するのに示唆的な言葉だと言えよう。この言葉は30歳を超えた「僕」が、「もう一度バスケットボールのゴール・ポストに全速力でぶつかり、もう一度グローヴを枕に葡萄棚の下で目を覚ました」ことを想像し、口にするかも知れぬ言葉だが、実は「僕」が出会った二人目の中国人の女子大学生の言葉だったのだ。大学時代、「僕」はある中国人の女子大学生と一緒にアルバイトをしたことがあり、バイトの最後の日に「僕」は彼女を誘って新宿のディスコに行った。「僕」は彼女と親密になりかけるが、彼女を山手線の逆回りに乗せてしまったことでぶち壊しになった。この中国人の女子大学生が再び駅に姿を現したのはその夜の11時過ぎで、そのとき、彼女はこう言った。「いいのよ。そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ。ここは私のための場所じゃないのよ。」(27頁, 下線筆者) 当時

の「僕」は彼女の言った「場所」とは何を指すのか分からなかったが、30歳を超えたいま、同じ山手線の電車でふと彼女の言葉を思いついた。

僕はドアの前に立ち、切符をなくさないようにしっかりと手に握りしめたままガラス越しの風景を眺めていた。我らが街、その風景は何故か僕の心をひどく暗くさせた。都市生活者が年中行事のようにおちいるあのおなじみの、濁ったコーヒー・ゼリーのような精神の薄暗闇が僕をまた捉えていた。うす汚れたビル、名もない人々の群れ、絶え間のない騒音、身動きの取れない車の列、灰色の空、空間を埋めつくす広告板、欲望と諦めと苛立ちと興奮。そこには無数の選択肢があり、無数の可能性があった。しかしそれは無数であると同時にゼロだった。僕らはそれらのすべてを手に取りながら、それでいて僕の手にするものはゼロだった。それが都会だった。僕はふとあの中国人の女の子の言葉を思い出した。「そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ」(38頁)

「無数であると同時にゼロだった」, 「僕らはそれらのすべてを手に取りながら、それでいて僕の手にするものはゼロだった」, 「僕」が体験したのは、まさに挫折からの無力感で、このような現実に対する無力や挫折は、巨大都市がもたらした苛立ちと不安によるものではなく、「僕らの言葉は失われ、僕らの抱いた夢はいつか霞み消えていく」(39頁) ことが分かったから来たものなのであろう。自分の今の状況をそう認めた「僕」は、二人目の中国人女子大学生を思い出し、彼女の言葉に強く共感を覚えた。「僕」は「3」に出てきた中国人女子大学生によって、「ここは僕のための場所でもないんだ」ということが分かり、これは彼女が「僕」に伝えた重要なメッセージとなった。この二人目の中国人女子大学生を手がかりに、次は「2」と「4」に出てきた中国人の役割を検討してみよう。

「中国行きのスロウ・ボート」の「2」において、小学校時代、中国人小学校へ模擬試験を受けに行く「僕」の経験が描かれた。「僕」は中国人小学校の教室で一人目の中国人と出会った。その人は中国人小学校の教師であると同時に模擬試験当日の監督官でもある。中国人教師は小学生だった「僕」たちに対して説教し、落書きをしないように要求した。二十年前の試験の結果について、「今ではすっかり忘れてしまった」(19頁) が、その先生のことだけははっきり覚えていて、また当時彼が語った言葉——「いいですか、顔を上げて胸をはりなさい」(19頁), 「そして誇りを持ちなさい」(19頁) も「僕」の頭に残っている。ここで特に指摘したいのは、村上春樹が『村上春樹全作品1979～1989』を出版する際、この短編の「2」の後半を大幅に改稿したことである。単行本及び文庫本では、その模擬試験の六年後か七年後の高校時代の話があり、「僕」と当時恋人だった女の子との回想が入っていたが、『村上春樹全作品1979～1989』版では、その中国人小学校への回想が完全に削除され、「2」は「二十年も昔の試験の結果なんて、今ではすっかり忘れてしまった。僕が思い出せるのは坂道を歩いていた小学生たちの姿と、その中国人教師のことだけだ。そして顔を上げて胸をはること、誇りを持つこと」(19頁) ということでのこの章の終止符が打たれている。この改稿によって、一人目の中国人の印象がより克明に浮かびあがり、中国人教師が伝えたメッセージも強調されたと言えよう。そのメッセージとはつまり、「顔を上げて胸をはること」, 「誇りを持って」生きていこうという精神のことだろう。

次に「4」に出てきた中国人を見てみよう。三人目の中国人は「僕の高校時代の知り合いである」(29

頁)。「友人の友人といったあたり」(29頁)で、「何度かは口もきいたことがある」(29頁)人だった。再会したのは「僕」の28歳の時で、彼は中国人を対象に百科事典を売るセールスマンになっていた。高校時代「育ちも悪くはなかったし、成績だってたしか僕より上のはずだった」(35頁)彼は、いま「仕立ての良いネイビー・ブルーのブレザー・コートに、色のあったレジメンタル・タイというきちんとした格好だった」(30頁)。しかし、当時「女の子にも人気のあった」(35頁)彼が、いま「何もかもがちょっとずつ擦り減っているような感じ」(30頁)で、それにその雰囲気は服だけに留まらず、表情にも表れていたのだ。「顔立ちもそれに似ていた。きちんと整ってはいるものの、顔に浮かんでいる表情は、その場に依じて何処からかむりやりかき集めてきた断片の集積にすぎないように見えた。」(30頁)このように高校時代の知り合いで、今百科事典を売る三人目の中国人は大きな変化を見せていたが、そこから「僕」が読み取れたのは時間の経つにつれて、あらゆるものが擦り減っていくことである。したがって、三人目の中国人が伝えたメッセージは人生は擦り減っていく過程なのだということである。

以上の考察から分かるように、「2」～「4」の三つの章に登場した中国人はそれぞれ違うメッセージを「僕」に伝え、「僕」は彼らを通じて、人生そのものが分かってきたのである。一人目の中国人教師は「誇りを持つ」態度を「僕」に教え、二人目の中国人女子大学生は現実に対する無力感を「僕」に認めさせた。そして、三人目の中国人セールスマンの変化によって、「僕」は人生が擦り減っていく過程であることがわかり、自分の夢も当然その擦り減りつつあるものの中に入っているのである。「中国行きのスロウ・ボート」に出てきた中国人は、このように「僕」の人生思考と関わり、「僕」はまさに中国人を通じて自分の人生思考を遂げたのであろう。これら三人の中国人は「僕」にとっては掛け替えのない役割を果たし、「僕」の人生思考の重要な手段と有効なルートを示しているとみなしてもよい。

三 中国人の「虚」と「実」

「中国行きのスロウ・ボート」の構造及び中国人の役割から分かるように、この短編に出てきた中国人は「虚」のもので、彼らの背後に「中国」という国家は存在せず、彼らも当然「中国」という国の代表を示してはいない。しかし、このような「虚」のものとしての中国人が、なぜ多くの人に「実」のものとして読まれてしまうのだろうか。

ここで、もう一度加藤典洋氏の言葉に触れたい。「タイトルに中国が出てくるだけではない。いわば主題が日本に住む中国人との関わりなので、あなた方のうちの何人かが色めきたち、関心を寄せるのは当然と言えます。」¹³⁾ 加藤氏はこの短編に対する中国人読者の関心ぶりを説明したが、その関心の背後に、中国文化圏の読者に共有された国家、文化共同体の意識が窺われる。つまり、「中国」或いは「中国人」という言葉を見ると、自然に自分の属した国家・文化共同体または国民のことを連想してしまうのである。「〇〇国」或いは「〇〇国人」のような言葉はまずそういう印象を人に与えたのであろう。

しかし、前述した加藤氏の結論は単なる感覚的印象からの帰結ではない。氏は村上春樹の人生体験をもってこの短編を解説したが、その手がかりとなったのは小説の「1」にあるつぎの文である。

13) 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』(講談社, 2011年), 99頁。

死について考えることは、少なくとも僕にとっては、ひどく茫漠とした作業だ。死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる。(13頁)

この短編には「死について考える」時、「僕」に「中国人のことを思い出させる」原因がないため、究明する必要があると思われ、加藤氏は自分の著書で次のような答えを試みたのである。「僧侶でもあり高校の国語教師でもあった彼（村上春樹を指す——筆者）の父親がかつて兵士として中国大陸に渡ったことがあることから、その父の経験をつうじて、彼が日本の中国侵略の歴史的な事実にも長年、深い関心を抱かざるを得なくなったという推定があります。」¹⁴⁾これに加え、村上春樹もイスラエル賞受賞式の演説で、父親の仏壇での祈りに言及し、それは「味方と敵の区別なく、そこで命を落とした人々のため」¹⁵⁾の祈りだったため、村上春樹の死に対する感覚は、自分の父親の戦争体験及び戦争で亡くなった人（当然中国人も含む）への祈りからきたものなのだ、と加藤氏は論じているのである。日本の侵略戦争で亡くなった中国人は村上春樹を死に直面させ、それゆえに、小説に「死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる」といったような言葉が出るのもごく自然なことであろう。

「死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる」という文だけを読むなら、加藤氏の分析は説得力があると思え、村上春樹を死に直面させたのは日本の侵略戦争で亡くなった中国人だったため、その中国人は当然「実」のもの、即ち「中国」という国家と結びついている存在に違いない。また、村上春樹の経験を小説の「僕」と重ねると、「中国行きのスロウ・ボート」は日中関係の暗示として読み取れるのも当然のことであろう。しかし、この短編の全体を考察すれば、加藤氏の推論は必ずしも的を射たものとは言えない。「1」の初めに次のように書かれている。

最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？

この文章は、そのような、いわば考古学的疑問から出発する。さまざまな出土品にラベルが貼りつけられ、種類別に区分され、分析が行われる。(11頁)

「死について考える」時、「僕」に「中国人のことを思い出させる」理由がないと同様、なぜ「最初の中国人に出会った」時を考証するのも不明である。ここで加藤氏の推論で解説するなら、おそらく次の答えが出るだろう。「最初の中国人に出会った」時は極めて重要で、それが意味では「僕」が日中関係を考え始める時点を表しているのである。しかし、小説の続きを読めば分かるように、「僕」は最初の中国人に出会った年を明らかにするために図書館に行ったが、開館を待っている間、「僕の中で何かが確実に変化してい」(12頁)て、結局「僕」は「自転車に乗って図書館とにわとりとに別れを告げた」(12頁)のである。そして、その原因として以下の二点をあげたのだ。

まずひとつ、僕が最初の中国人に出会った正確な日付になんて誰が興味を持つだろうか？

14) 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』(講談社, 2011年), 101頁。

15) 村上春樹『雑文集』(講談社, 2011年), 79頁。

もうひとつ、日あたりの良い読書室の机に置かれた古い新聞年鑑と僕のあいだに、これ以上お互いに分かち合うべき何が存在するだろうか？（12頁）

「中国行きのスロウ・ボート」がもし本当に日中関係を表現しているなら、最初の中国人に出会った日付への考証は重要であろう。それは「僕」が日中関係を考え始める時点となる可能性が高く、そしてそれを確かめるのも至極簡単な作業である。なぜなら、「僕」の記憶では、「最初の中国人に出会った」年が「ヨハンソンとパターソンがヘヴィー・ウェイトのチャンピオン・タイトルを争った年だった」（11頁）ので、「図書館に行って古い新聞年鑑のスポーツのページを繰ればいいわけだ」（11頁）。しかし、「僕」は結局その作業を諦め、それにその放棄の理由はいかにも不思議なものとは言えよう。日中関係の暗示なら、関係そのものが重点で、誰が日付に興味を持つかは無関係であろう。一方、「古い新聞年鑑と僕のあいだに」、当然「分かち合うべき」ものが存在する。その新聞年鑑の調査によって、「最初の中国人に出会った」日付が確定でき、何回も繰り返したが、その日付は「僕」が日中関係を考え始める時点となる可能性が高いということなのである。要するに、加藤氏の推論で小説を解読するなら、換言すれば、この短編に出てきた中国人を「実」のものとして捉えるなら、日付考証への放棄は合理性を欠いた行為で、その放棄の理由も不思議なものと言わざるを得ない。

それでは、もしこの短編に出てきた中国人を「虚」のものとして捉えるならどうなるのだろうか。まず、「最初の中国人に出会った」日付への考証について考えよう。本稿の“二”の部分、つまり中国人の役割に対する分析から分かるように、中国人は「僕」の人生思考においては、極めて重要な役割を果たすものである。したがって、「最初の中国人に出会った」時間への考証は、人生思考の始まりに遡ることを意味し、これは「僕」が自分の人生を整理する時必ずやる作業であろう。次に、なぜ考証作業を放棄するかについて検討してみる。「僕」にとって、中国人が人生思考の重要な手段と有効なルートであるため、「最初の中国人に出会った」時間に対する考証をやるべきだった。ここで「1」と「5」の両章における「僕」の心境が無視できないだろう。この前後両章の叙述時間が一致するため、「1」に登場した「僕」も「5」の「僕」と同様、すでに敗北感を覚えたはずである。したがって、そういう心境だった「僕」から見れば、自分の人生思考の方法に対し、おそらく誰も興味を持っていないだろう。考証放棄の一つ目の理由から、「ここは僕のための場所でもないんだ」という言葉に共感を覚え、30歳を超えた「僕」の心境が十分に読み取れるだろう。一方、「僕」にとって、中国人との出会いではその伝えられてきたメッセージがポイントで、時間の確実性はそれほど重要なものではないと言えよう。これは考証放棄の二つ目の理由となる。つまり古い新聞年鑑は時間の確実性だけが提供でき、内容（メッセージ）そのものを提供してくれないので、「古い新聞年鑑と僕のあいだに、これ以上お互いに分かち合うべき」ものが存在しないというわけである。中国人からのメッセージは極めて個人的なもので、二つ目の理由はまさにこの短編における中国人の独特な役割を証明しているのであろう。最後に、なぜ死が「僕」に「中国人のことを思い出させる」かについての検討である。前述のように、「僕」は「僕という一人の人間の存在と、僕という一人の人間が辿らねばならぬ道について考え」（13頁）るとき、まさに中国人に頼っているのである。人生思考のゆえに、「死」は遠い将来のことだが、思考範囲に入るはずで、したがって、「僕」の考えがその人生の終点に触れた時、小説の言葉で言えば「死について考える」時、今までと同様中国

人のこと、つまり「僕」にとって人生思考の重要な方法と有効なルートのことを思い出したのであろう。

以上の考察から分かるように、もしこの短編に出てきた中国人を「虚」のものとして捉えたら、「実」のものとして読む際にぶつかった難問が解決でき、「1」における「僕」の行為も合理的になったわけである。しかし、「中国行きのスロウ・ボート」に出てきた中国人は果たして本当に青木保氏の言ったように、「もうどうでもよくなってしまっ」¹⁶⁾た存在なのだろうか。

2003（平成15）年1月、村上春樹は林少華氏のインタビューを受け、次のように言ったことがある。

僕は神戸育ちで、神戸は華僑がたくさん住んでいる街です。僕のクラスには華僑の子供がたくさんあり、小さい頃から僕の体に中国要素がしみ込んでいるのです。父親が在学中に徴兵で中国に渡り、中国での経験を語ってくれたこともあります。こういう意味では、（中国と）縁が深いでしょう。僕の短編の一つ「中国行きのスロウ・ボート」は小さい頃、神戸での経験を元に書かれた小説です。¹⁷⁾

「中国行きのスロウ・ボート」は小さい時の経験に基づいて書かれた小説と述べているため、小説に出てきた中国人を完全に「虚」のものとして捉えるのはある程度無理なところがあるだろう。実はこの短編を読めば分かるように、「僕」が出会った三人の中国人は現実性の高い在日中国人で、彼らは日本という異国で生活していると同時に、「中国」という国に対し帰属感を抱いているのである。一人目の中国人教師は「実」の中国人として日中関係を語り、二人目の中国人女子大学生は「実」の中国人として、自分が「他者」であると実感し、「ここは私の居るべき場所じゃない」と嘆いたのである。それに三人目の中国人セールスマンは「実」の中国人として、同胞である中国人を対象に百科事典を売っている。彼らはアイデンティティを持つ独立した人間として存在し、日本という異国で「中国人」のラベルを貼られたまま生きているのである。したがって、この短編に出てきた中国人は「どうでもよくなってしまっ」た存在ではなく、彼らを簡単に「虚」のものとして捉えるわけにはいかないであろう。

しかし、一方、「中国行きのスロウ・ボート」に出てきた中国人の役割から見れば、その三人とも明らかに「中国」という国家と無関係にあり、「僕」と彼らとの出来事をそのまま日中関係の暗示と見なすのも無理であろう。「虚」の中国人は、この短編では、「僕」の人生思考の重要な方法と有効なルートであり、独特な役割を果たしているのである。村上春樹は「中国行きのスロウ・ボート」において、「中国」という国の代表である「実」の中国人を登場させながら、中国人の役割を転換し、結局「中国」と無関係にある「虚」の中国人を描き出した。このように「実」の中に「虚」があり、「虚」と「実」の両方とも備えた独特な創作方法こそ、「中国行きのスロウ・ボート」の最大の特徴と言えよう。

16) 青木保「六〇年代に固執する村上春樹がなぜ八〇年代の若者に支持されるのだろうか」（『中央公論』1983年12月号）、271頁。

17) 林少華『为了灵魂的自由』（中国友谊出版公司，2010年），121頁。原文は下記の通りである。「我是在神戸长大的。神戸华侨非常多。班上有很多华侨子女。就是说，从小我身上就有中国因素进来。父亲还是大学生的时候短时间去过中国，时常对我讲起中国。在这个意义上，是很有缘分的。我的一个短篇《去中国的小船》，就是根据小时——在神戸的时候——的亲身体验写出来的。」

おわりに

「中国行きのスロウ・ボート」の構造が示すように、この短編の「1」と「5」はそれぞれ「僕」の人生思考の起点とたどり着いたある時点を意味し、これによって、「1」と「5」に挟まれた三章は「僕」の人生思考の過程となり、その思考はまさに中国人に頼っているのである。「僕」は自分の出会った三人の中国人を通じて人生そのものを理解した。「僕」にとって、彼らは人生思考の重要な手段と有効なルートとも言えよう。そして、この短編における中国人がこのような独特な役割を果たしているからこそ、「僕」の「最初の中国人と出会った」時間考証への執拗と放棄があり、「死について考える」とき、「中国人のことを思い出」したのである。

人生への思考は極めて抽象的な作業である。しかし、「中国行きのスロウ・ボート」では、村上春樹は中国人に独特な役割を賦与し、抽象的作業を具体的かつ現実みのある物語、つまり「僕」と三人の中国人との出来事に転化させたのである。このような「虚」と「実」の転換は実に見事なもので、このような優れた創作方法によって、「中国行きのスロウ・ボート」に多大な想像空間をもたらしたと言えるだろう。

